

縄文時代

縄文時代では早期、中期～晩期の遺物が出土しており、中期後半のⅢ群 B1 類と晩期前葉の V 群 A1 類が主体となっている。溝状 T ピット掘削時の工具痕の検出が特筆できる。上幌内モイ遺跡（厚真町教育委員会 2009a）でも同様の工具痕が見つかっており、類例が着実に増えてきている。

出土遺物の組成は礫石器が極端に少なく、焼土等の遺構の出土も非常に少ない。各時期を通してキャンプサイトの利用されたと考えられる。但し、中期後半のⅢ群 B1 類と VFCB-01 や多量の黒曜石のフレイク・チップ・黒曜石製石鏃の分布が重なり、出土層位もほぼ同様であることからこのころのものと考えられ、石鏃製作を行っていた可能性がある。

（天方 博章）

第2節 続縄文土器について

続縄文土器の内、特に出土点数の多かった後北 B 式～C₁ 式土器について、集中区出土のもので復元個体のものを中心に比較し、本遺跡での後北 B 式～C₁ 式土器への変遷をまとめたい。これは遺跡内での変遷過程を表すもので、道内全体を含めた土器型式の変遷を示すものではない。但し、地域毎における変遷過程を示すことで、地域差の捉えにくい、これらの土器型式の地域差を明らかにしていく可能性があると思われる。

対象としたものは表 VII-1 を参照されたい。以下では図 VII-1 で付した番号で記述しており、表 VII-1 で本文中の図番号と対応している。集中区 14～16 については復元個体が得られなかったので、破片資料も掲載している。集中区 14 のものは同一個体である。細片化していたため接合が困難であったがほぼ 1 個体分の破片がまとまって出土したものである。ミニチュア土器も掲載しているが（2・8・16）、本文中でも記載しているように、特殊な属性を示すものが多いことから、ここでは特に断りがない限り除外している。また、本文中でも記載した胎土にやや大粒の石英を含むものも搬入品の可能性が非常に高いことからここでは除外する（24・26～28）。

以下、属性ごとに後北 B・C₁ 式土器の比較を行うが、後北 B 式・C₁ 式と後北 B 式～C₁ 式の移行期の土器の 3 種類に分け記述する。移行期の土器は本文中でも触れた 15・17・31 である。

〔器種・器形〕いずれも倒鐘形の深鉢形土器が主体である。後北 C₁ 式には片口（1）のものが 1 個体ある。ここでは対象としていないが集中区 11 の後北 B 式土器で壺と見られる破片が出土している。器種の組成に違いが見られる。

〔突起〕後北 B 式では対象とした 15 点中 13 点が 4 ヲ所に突起を有するもので圧倒的に多い。移行期のものは 3 点中 1 点が 4 ヲ所に突起を有するもので、他 2 点は 8 ヲ所に突起を有するものである。後北 C₁ 式はバラエティーがあるが、8 ヲ所に突起を有するものが多い。後北 B 式～C₁ 式土器に移行する際、突起の数に変化が生じていることが明らかに読み取れる。

〔口唇部断面形および刻み〕断面形状から見ると、後北 B 式では外削ぎ隅丸切り出し状のものが多く、丸・尖状のものがやや見られる。移行期のものにはまともは見られない。後北 C₁ 式のものは丸・尖状のものが多くなっている。刻みは、後北 B 式では圧倒的に口唇に丸い棒状の工具でほぼ直行して刻みをつけるものが多い。移行期のものも同様である。後北 C₁ 式では口唇と平行する方向から刺突して、爪形の刻みを付けるものが増えてきている。口唇の断面形および刻みは後北 B 式では、外削ぎ隅丸切り出し状で、口唇に対してほぼ直行して刻みをつけるものが主体であり、後北 C₁ 式で

は断面形状が尖り・丸状で刻みの手法が多様なものが主体となっていくようである。

〔底部断面形〕底部断面形状が確認できるものは少ないが、後北 B 式では底部側面の張り出しの強いものが多く、C_i 式では見られなくなる傾向が読み取れそうである。

〔文様構成〕文様帯は後北 B 式では胴部中央付近までのものが多く、移行期のものも同様である。後北 C_i 式では文様帯が胴部中央よりも下位になるものが主体となる。また、擬縄貼付文・隆起線文で構成される文様は後北 B 式では三角形や台形を直線的・曲線的に文様を構成するものがほぼ同数であるが、移行期のもの・後北 C_i 式では直線的に三角形や台形を構成するものは見られず、曲線的に文様を構成するものが主体となる。文様帯の広いものは後北 C_i 式から主体となっていく、文様は B 式から曲線的なものが増加し、移行期では直線的に文様を構成するものは見られなくなっていく。

〔文様要素〕擬縄貼付文・隆起線文を除く文様要素は、後北 B 式では刺突文のみを施すものが主体であるが、刺突文に短沈線文や沈線文を組み合わせたものが僅かにある。移行期・後北 C_i 式では殆ど刺突文のみを施すものである。

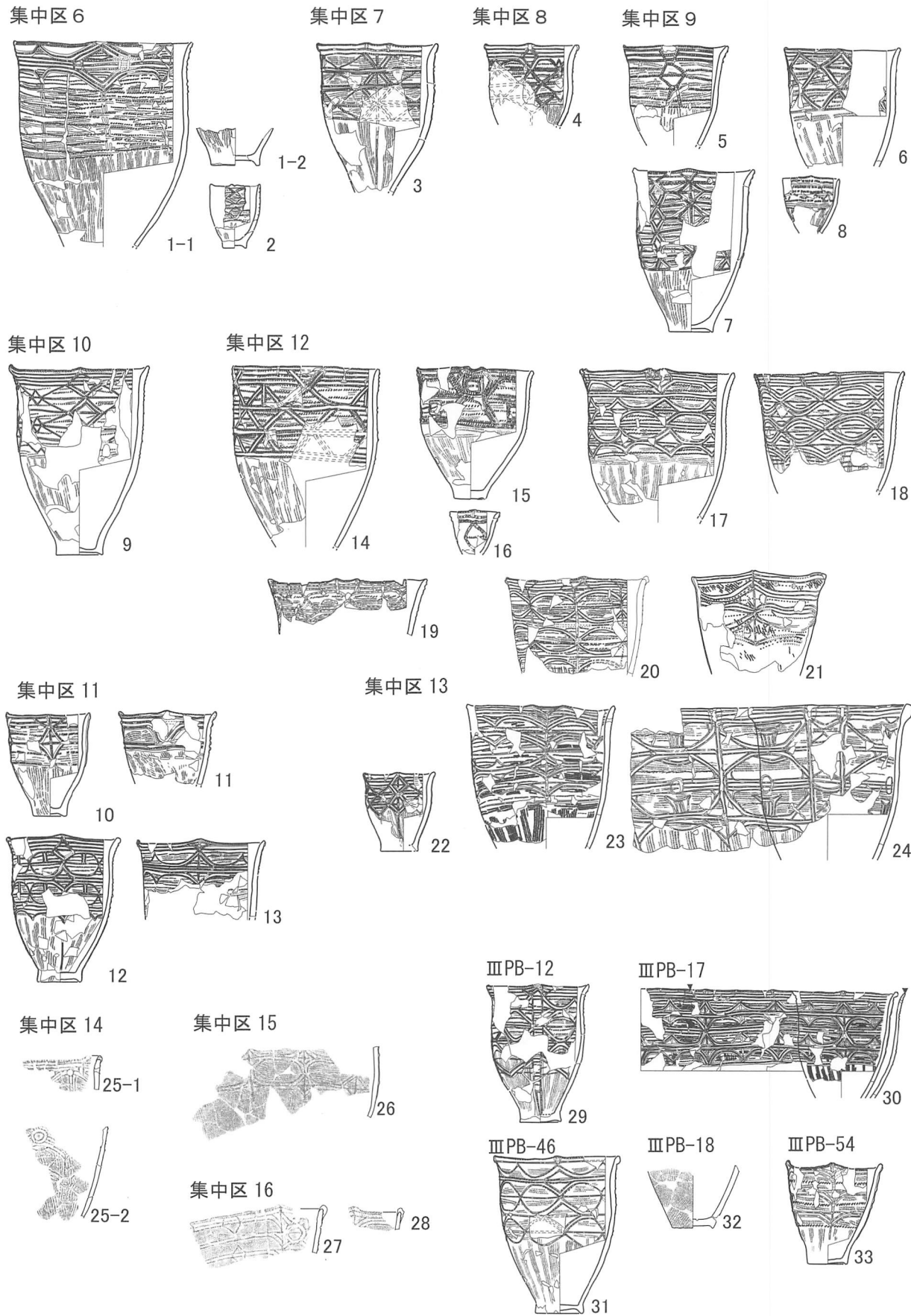
〔刺突文〕擬縄貼付文以外の刺突文については、後北 B 式・移行期のものでは爪形の刺突を斜め下方向から施文するものが主体を占めるが、後北 C_i 式では爪形の刺突の他に、点・線・三角形のもの等バリエーションがある。爪形のものでは下方向から刺突するものが主体となる。

〔地文〕胴部下半の地文で比較すると、後北 B 式では帯縄文が密に施されるものも見られるが、主体は間隔をあけて帯縄文を施文するものが主体である。移行期・後北 C_i 式では帯縄文が密に施されるものは見られない。また、後北 C_i 式では 21・25 が胴部上半で斜行縄文が施されている。

以上、本遺跡における後北 B 式～C_i 式土器への変遷を属性毎に確認してきた。後北 B 式・C_i 式土器の分類の画期は擬縄貼付文・隆起線文であるが、各属性の中で主体となるものがそれと一致して変化している訳ではないことが判った。特に、〔文様構成〕については後北 B 式の段階で擬縄貼付文が直線的なものと曲線的に構成するものの比率がほぼ同じで、移行期後直線的なものはほぼ見られなくなることから、後北 B 式の中での新旧関係を示す指標となりそうである。また、今回の限られた資料の中では明らかにすることは出来なかったが、後北 C_i 式土器の中での新旧関係を示す属性として〔口唇部断面形および刻み〕・〔刺突文〕が指標の 1 つとしてなりえる可能性がある。

今後はオニキシベ 2 遺跡の周辺で上幌内モイ遺跡（厚真町教育委員会 2009a）や現在発掘調査が継続中のヲチャラセナイ遺跡等でも同時期のものが出土していることから、これらも含めて検討を行い、後北 B 式～C_i 式土器への変遷を考えたい。

（天方 博章）



図Ⅶ-1 後北 B・C₁式土器集成図

表Ⅶ-1 土器属性表

挿図 番号	集中区 及び遺構	土器型式	本文中 挿図 番号	個体 名称	分類	器形	突起	口唇 部断面 面形	底部 断面形	文様 構成	文様 要素	刺突文	地文	胎土
図Ⅶ-1	集中区6	後北B式	IV-4-1・2	ZP024A	VIC2	A	C	D1	B1	B3	A4	A4	B	A
図Ⅶ-2	集中区6	後北式	IV-4-3	ZP029A	VIC	B [┐]	-	B3	B1	G	3	C5	E	A
図Ⅶ-3	集中区7	後北B式	IV-6-1	ZP022A	VIC2	A	D	A1	-	C1	A	-	B	A
図Ⅶ-4	集中区8	後北B式	IV-8-1	ZP026A	VIC2	A	C	A1	-	C5	A1	A2	A	A
図Ⅶ-5	集中区9	後北B式	IV-11-1	ZP009A	VIC2	A	C	D1	-	F1	A1	A2	B	A
図Ⅶ-6	集中区9	後北B式	IV-11-2	ZP001A	VIC2	A	C	D1	-	C1	A1	A2	B	A
図Ⅶ-7	集中区9	後北B式	IV-11-3	ZP018A	VIC2	A	C	D3	B1	D1	AB3	A3	A	A
図Ⅶ-8	集中区9	後北式	IV-11-4	ZP068A	VIC	B [┐]	B?	B3	-	G	3	A1	B	A
図Ⅶ-9	集中区10	後北B式	IV-15-1	ZP019A	VIC2	A	C	D1	A1	C1	A1	A2	B	A
図Ⅶ-10	集中区11	後北B式	IV-19-1	ZP007A	VIC2	A	C	B1	B1	C3	A3	A2	A	A
図Ⅶ-11	集中区11	後北B式	IV-19-2	ZP013A	VIC2	B	C	B1	-	B3	A6	-	B	A
図Ⅶ-12	集中区11	後北B式	IV-19-3	ZP017A	VIC2	A	C	D1	A1	C3	A1	A2	B	A
図Ⅶ-13	集中区11	後北B式	IV-19-4	ZP016A	VIC2	B	C	B1	-	B3	A1	A2	-	B
図Ⅶ-14	集中区12	後北B式	IV-24-1	ZP021A	VIC2	A	A	C1	-	C1	A1	A2	B	A
図Ⅶ-15	集中区12	後北C1式(移行期)	IV-24-2	ZP008A	VIC3	A	E	B3	-	C2	B1	A2	B	B
図Ⅶ-16	集中区12	後北B式	IV-24-3	ZP034A	VIC2	B [┐]	C	A1	-	E?5	A1	A2	D	A
図Ⅶ-17	集中区12	後北C1式(移行期)	IV-24-4	ZP012A	VIC3	A	E	D1	-	C3	D1	A3	B	A
図Ⅶ-18	集中区12	後北C ₁ 式	IV-24-5	ZP020A	VIC3	A	E	B1	-	D3	B1	A4	B	A
図Ⅶ-19	集中区12	後北C ₁ 式	IV-25-6	ZP053A	VIC3	a	E	B3	-	3	B1	A2	-	A
図Ⅶ-20	集中区12	後北C ₁ 式	IV-25-7	ZP014A	VIC3	A	E	A1	-	D?3	B1	C5	B	A
図Ⅶ-21	集中区12	後北C ₁ 式	IV-25-8	ZP010A	VIC3	E	B?	C2	-	C?5	B1	B3or4	E	B
図Ⅶ-22	集中区13	後北B式	IV-30-1	ZP025A	VIC2	A	C	A1	A	C1	A1	A2	A	A
図Ⅶ-23	集中区13	後北C ₁ 式	IV-30-2	ZP003A	VIC3	A	D	B1	-	D3	B1	A4	B	A
図Ⅶ-24	集中区13	後北C ₁ 式	IV-30-3	ZP004A	VIC3	A	A	B1	-	D4	B1	A5	B	D
図Ⅶ-25	集中区14	後北C ₁ 式	IV-33-1・2	ZP054B・C	VIC3	a	-	C3	-	D4	B1	E1	E	A
図Ⅶ-26	集中区15	後北C ₁ 式	IV-35-1	ZP060A	VIC3	b	-	-	-	C3	B1	D1or5	B	D
図Ⅶ-27	集中区16	後北C ₁ 式	IV-37-1	ZP056A	VIC3	a	-	B	-	-	B1	A2	-	D
図Ⅶ-28	集中区16	後北C ₁ 式	IV-37-2	ZP057A	VIC3	a~b	-	B	-	4	B1	A2	-	D
図Ⅶ-29	ⅢPB12	後北B式	IV-39-7	ZP015A	VIC2	A	C	D1	A1	D3	A1	A2	A	A
図Ⅶ-30	ⅢPB17	後北B式	IV-39-8	ZP002A	VIC2	A	C	D1	-	D3	A3	A3	B	A
図Ⅶ-31	ⅢPB46	後北C1式(移行期)	IV-39-9	ZP011A	VIC3	A	C	A1	B1	C3	D	-	B	A
図Ⅶ-32	ⅢPB18	後北式	IV-40-10	ZP062B	VIC	b~c	-	-	-	-	-	-	-	D
図Ⅶ-33	ⅢPB54	後北C ₁ 式	IV-40-11	ZP006A	VIC3	B	C	C3	B1	D3	B1	D5	B	A